



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	知的障害児の弁別学習過程の特性に基づく学習支援に関する研究(審査結果の要旨)
Author(s)	喜多尾, 哲
Citation	
Issue Date	2014-03-14
URL	http://hdl.handle.net/2309/138590
Publisher	
Rights	

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究は、中度知的障害児の学習過程の特性、中度知的障害児の過剰訓練および言語教示訓練の効果について、健常児・軽度知的障害児と比較しながら、明らかにすることを主たる目的としている。

アメリカにおいては1960年頃から、日本においては1970年ころから、知的障害児の学習の研究は数多く行なわれているが、基礎的な研究は少ない。特に中度知的障害児については、その研究は散発的で、発達の検討はほとんどなされていない。このことから、本研究の意義は大きいといえる。

さらに、弁別学習における中度知的障害児の誤反応の分析を行っている点、中度知的障害児を対象として、言語的な学習支援方法と過剰訓練学習のような注意を促す学習支援方法とを比較検討しながら研究を進めている点等に、独創性があると考えられる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究においては、知的障害以外の要因が学習成績に及ぼす影響を可能な限り少なくするため、知的障害といっても、明らかな運動障害や情緒障害のある知的障害児等は研究対象に含まれていないという点で、研究対象の選択方法には妥当性があるといえる。

また、弁別学習に関する実験手続きは、心理学や教育心理学の領域において健常児を対象として実施して高い評価を得ている Kendler and Kendler (1962) らの先行研究の手続きを踏襲している。

したがって、被験対象の選定、研究手続き等、研究方法は十分に妥当なものといえる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

データ収集に関して、障害児を対象とする場合には健常児に要する時間の数倍以上の時間がかかるのが常である。喜多尾氏は時間をかけて可能な限り多くの知的障害児から収集している。したがって、多数の実験データの処理に関して、統計的処理を施すことができている。

しかし、知的障害児を研究対象としているため、実験計画通りに、それぞれの細胞に計画的に人数を割り当てにくいことがあり、統計的に十分な分析ができていない部分も少しはある。とはいえ、多くの分析において、統計的仮説検定を適用できる程度のデータを収集して、分散分析、 χ^2 二乗検定など統計的な分析も適切になされている。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか。

軽度知的障害児は言語化訓練により移行学習の促進効果が認められ、他方、中度知的障害児は言語化訓練により移行学習の妨害効果がある、という結果について、次元性の反応が MA (精神年齢) の発達の違いにより異なる、中度知的障害児の場合は、言語化訓練により刺激と反応の結びつきが強くなりすぎて移行学習が困難になっていると考察している。

また、過剰訓練の結果は、中度知的障害児において促進効果が大きいという結果が得られてい

る。このような結果について、過剰訓練によって道具的な選択反応を過剰に繰り返すことになり、適切次元に対する注意の反応が高まり、非言語性の媒介反応が可能になったと考えられるとしている。

さらに、中度・重度知的障害児に経年的に学習実験を繰り返すと、学習未達成の子どもが何年か後に学習できるようになり、その後も保持されている。保持されている理由として、中度知的障害児にも過剰訓練の効果が認められたが、中度や重度の知的障害児に繰り返し学習実験を行うことは過剰訓練と通じるものがある、としている。

以上のような考察および結論は、妥当なものと判断できる。また、このような考察および結論は、8編の学術論文が下敷きとなっており、学術水準に十分に達しているといえる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか。

中度知的障害児に対して、これまであまり行われてこなかった弁別学習の誤反応分析を行い、誤反応を単に誤り反応としてしまうのではなく、①特定の次元に対する偏好・偏嫌反応、②前試行とは異なった刺激に反応する交替反応、③同じ刺激に反応する反復反応、④前試行において正(負)であった刺激に反応してしまう誤反応に分類して、誤反応について踏みこんで検討を行ったことの意義は大きいと考えられる。

言語化訓練に関して、軽度知的障害児にはその訓練効果は認められた。しかし、中度知的障害児の場合、先行学習は促進させるが、移行学習事態には有効に作用せず、先行学習の手がかりに固執させてしまうという結果を見出し、中度知的障害児特有のものだと説明した。このように、軽度知的障害児と中度知的障害児との間の言語化訓練の効果の違いを見出したことは高く評価される。

中度・重度知的障害児に経年的に学習実験を繰り返し、学習が未達成であった子どもが何年か後に学習できるようになり、その後も保持されていることを見出している。このような繰り返しの効果については、中度・重度知的障害児の学習支援のあり方に大きな示唆を与えるものである。

以上のことから、審査委員会は、全員一致で東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士の学位論文としてふさわしいと判断した。